



Title	農村調査野帳抜書
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	朝鮮農村研究（昭和 23年）の、著作集Ⅶ巻用の編集割付 61頁。
Issue Date	1948
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77335
Type	manuscript
File Information	D003_05.pdf



20

22

別

No. 10

6号 3字下.

農村調査野帳抜書

鈴木榮太郎

前書

本篇は朝鮮に於ける農村調査

に用いたる野帳より抜書である。南

鮮の一部落（全羅南道宝城郡熊峙面中山

里）に於ける婚姻に関する事項と北鮮

の一部落（黄海道瑞興郡龍坪面月灘里）に

於ける部落神の祭祀に関する事項との

二部より成つて居る。前者は家族の研究

3

4

5

59

6号3字下

完に對して重要な事項であり、後者は
村落の研究に對して重要な事項である
といふ意味から、特に此の二項を抜き
出したのである。それは戸田先生の還
曆を祝するうちにふさばしいと思つたか
らである。

一部

十二本

婚禮と其前後

3

新田新落内への新落内婚の儀は年七十九

才の仕在^某親氏か未だ足らずあるいと云ふ。少

くとも六十年来皆年であらう。新落内には適当

なところなし。姻戚との間に不和あるは易

いなり。新落内婚はない。姻戚は偏りと同様に

遠ざけたりはなからずと云ふ程である。新

田新落内は勿論の事。大山見内においです

通婚の儀は絶えず。近頃はところでは欠乏

をよくなりすぎたり。又姻戚にちか

行々来々くちううさくちうあう成す可く
 遠いととくと過婚す。近頃は姻戚と近く
 打つ搦になつて似向あふ。然し近い所と過
 婚す。は實國有宗親程さうなり。似向あふ。
 大山名内にも過婚の例はない、
 過婚の例はない。江山名、中山名にも然り。
 あり。この新夜の名は康津即兵衛而兵衛名
 中トウヤクトラ而と過婚す。うかふ。五組
 位はあり。他即と過婚を打あいたは名あふ
 には有つ。

某氏(七十萬)

白采富氏の姉妹及い

行つ工部は次の如く

妹 伴順 本江山里

妹 蘭順 本龍磐里

妹 牛順 本即有治向芳村里 (ニノ三三三)

女 蓮都 本向山里

女 蓮都 本向山里

女 中福 本泉向書堂里 (隣村の向) (ニノ三三三)

孫女 上順 本向山里 (ニノ三三三)

仲今人は友人、知人、素客なり。行く
 人知仲今人になり。行かない。女の行く人なり。
 任用は世ぬ。よい娘か。事を知り。西班
 には足に行く。よし。常には。足に
 行く。男の娘か。は女か。娘に足に行く。娘の
 娘か。は足の父か。男と足に行く。よいと決定
 する。男の娘か。年紙の清姫とする。即ち
 張紙(チャパジ)に書いた清姫書(カッパンソ)を送
 る。若水は下人なり。おいて行く。下人なり。
 と。若水は知人の下人を借りて使者とする。その

時節は何とす。行かぬ。世の例にそはを
 不知。と失法。法紙に書く。許婚書（おおし
 し）を送。さうする。次の例。四目見
 一廿。と云。張紙に男の生年月日を書く。と
 云。を送。別は吉日は擇はぬ。と云。四目見と昔に世の服地
 にな。絹布を送。使名は常。下田。又は同好
 友身。の者。と云。使名は町字に接する。
 四目見と昔に上流。は金。は送。と云。下流。は多
 額。の金。を送。と云。故に下流。は婚期。を過す。と云
 常。に。婚。書。を。送。る。者。は。多。し。と云。然し。婚。禮。の。形。式。

邪はしな
。 根は北を
きけよと
。 男の育ち
も

く
の
中
に
は
贈
物
を
贈
り
ま
す
と
し
て
お
か

中へある。婚書紙（おんしやうし）これは子か三人を
 九と述ぶの字は大切に保管して置く。新縁
 ち忍れよ為りてしや。大子を取嫁に書し
 ず。とその日に女あそびを眼をかむと冠と足
 の外に布地を若手入れしや。お前中流より家へ嫁に通行しん
 音頭取りとしん。歌いはなく拍子しや。お力
 馬車と云ふ。昔中流より家の嫁に呼ばれし
 リケンが隠れしと云ふ事ありしや。
 女の節夜に入しや、女の字の近所の家か控
 へ室になつて片のうにその字に入し。その家

へ事を駐居(421)と云ふ。そこでお茶や煙
 草、向ふお食物を出さ。一休サレて中房か又
 物と答ふいふに果して新婦の字に知つておめ
 だ。それと弖幣の儀と云ふ。弖幣の禮をす
 し。中房は駐居に居る。そこで新郎に官服(弖)
 賜ふ。それと弖幣の儀と云ふ。弖幣の禮をす
 へる。新郎は馬に乗る。縁配は異行て女の字
 に向ふ。その途中、女儀のお礼の名や弖幣の
 草を遣ふ。いとつうをす。新郎は扇を新婦に
 へる。その扇を結ぶは奪いと云ふ。

色んの抑回答として却即をいすめ。中房が
 袖佐領をすよ。中房は去来よ大直人の身代り
 になつて鷹をしゃうとすよ。み、昔年迄は直人
 の意をいふと何あうと氣なす。何か一つ袖の印と
 して筋をやらすにさ。牛中たしとや。こ
 のいたつとを奪廟(タムソ)と云ふ。奪廟は金
 上何回となく行りゆさうみ。奪廟の時
 抑回答は、例へば「経書に人の邪意して昔少の
 病に馬に米つて何故にゆくか」と尋ねよ。
 与の他色んかすをたす悪く解回す。時に

客路の喧嘩と有り仲人あへて協合も有り。
 富扇とや、青春道は未だ若くあつた、
 此片は三代の男も片。
 富扇と清き、一行は或女の字の式瑞に
 日。女御の近頃は去あゝ大く去。此方は
 大庭の御つたか、今度行ぬ。天幕と片。
 中庭竹と松と椿と飾。皆生花とあ。あ。
 その外に色んな花と飾。鳥の紙を両側
 につないであ。中央にテーつんあつて
 の上には米と豆をへ蠟燭と火を照す。本館

又市製の雁か草上に錦つてある。

の奥(ホ)か二匹錦つてある。草座か西側に振
けつてある。

一行か式場に入ると、人接(客の)司馬(司馬)か揃え行

み。一回もかたに答へて了。次に執事か揃えし

て歩して席につけるとある。我即は馬から露積

を止場にしていり降りよ。物々積んとある。露積

する。か、二、の露積は果の儀一儀とある。物

事か、物、受けか、は露積を為してある。その儀

は、い、と、云、い、物、一、石、と、答、え、よ、の、か、お、り、の、

事、。次に執事か揃えし、我主以下席につ

人様と峰ふ案内は新郎によし新婦に一人
 つ、ついで片。一回席につくと、次に執事
 新郎正装せよと云ふ。又右の指し雁をあげ
 よと云ふ。下せぬ福佐す。次に新郎立の
 号令あり。次に新郎二回礼せよの号令。次
 に東方向つゝしり玉けの号令。そとつて今有
 任印つゝあつてあつて麻風をとつて、両方足
 之と新衣信置ん置く。次に新婦出よの号令。
 次に新郎正装せよ。次に新婦回を礼せよ。新

其即新婦を飲
 たるの盃は三體
 執事。
 一、ウシダヤン
 銀又は陶の盃
 二、ノツヂヤン
 三、ビョウヤン
 要は作たる盃
 右の不定の盃とい
 一回、飲むるにあ
 たり。盃の盃は二
 個で三色の盃
 糸の両側につい
 居る。

に	新	郎	は	内	房	に	お	い	に	宴	め	す	。	の	一	。	内
に	り	起	ま	り	積	ん	い	あ	。	人	物	お	上	客	は	金	廊
入	り	。	その	際	人	物	お	揃	え	す	。	そ	う	に	は	お	膳
礼	装	と	し	る	お	宴	に	行	く	。	その	後	新	郎	お	内	房
水	。	新	郎	は	内	房	に	入	り	。	一	度	新	婦	内	房	に
次	ら	に	新	婦	入	水	の	号	令	お	す	。	次	に	新	夫	入
上	の	号	令	に	従	つ	て	その	通	り	に	行	け	水	。	式	は
も	次	ら	く	に	手	を	洗	ふ	。	次	に	縁	酒	を	飲	め	。
即	二	度	禮	せ	よ	。	午	を	洗	へ	。	そ	う	に	新	郎	と

房で新郎と接する。のは人指と世例の近親の

若い男達である。金廊には老人の男達も出

。世は人なりと云い。

内房と接しにはい馳走又深山に轉じて歸

る。内房には新郎の人指の膳がとる。

。皆も集まり、そこを食ふ。人指の力も是

酒をつまみ、新郎に。皆酒を飲み、馳走を食

ふ。同じ所事、金廊にも行けり。

金廊に、上客は近くと、そこを食ふ。

日に、若は皆泊る。酒宴も終る。

飯
ふ
ふ
ふ
人
か
や
下
女
ふ
ふ
ふ
ふ
ふ
ふ
母
は
さ
か

に
と
り
も
な
い
。
念
ね
人
様
お
手
印
を
案
内
し
て

氣
室
め
に
敷
き
ち
と
に
つ
わ
ら
ず
。
上
客
か
わ
よ
な

う
上
さ
せ
。 上
客
五
泊
小
は
お
寝
み
の
猿
持

12
零
10
1
7
九
2
来
1
6
3
1
2
又
1
3
1
wa
1
世

人
は
二
七
七
。 其
の
前
に
我
婦
の
若

い
云
遠
し
の
、
、
片
よ
。
云
力
同
新
婦
、
江
新
字
に
居

たの
し
み
人
極
み
ま
つ
ん
ひ
新
婦
の
婦
や

伯母
子
子
新婦
子
新郎
女
一人
斤
子
戊戌
子
亥
戌

二
 来
 下
 三
 二
 一
 二
 人
 の
 お
 陽
 か
 七
 十
 西
 下
 七
 下
 〇

この時迄新婦は娘としての髪形であつた。即ち
 髪を留めたまゝであつた。余人去りて即ち新婦は
 人として食ふ事とす。それを隙の隙向から
 我々の家のといふと。一着無心といふと
 又うは新婦の母とす。その時新婦は大抵
 向いて居る。男が所へありては通事とせぬ。
 然しその中に女が男に酒や飯をすゝめぬ。食
 べ終つて二人はそこへ寝る。その晩寢につく
 前、男が女の髪を結む目(耳縁)キユンといふと云ふ
 といふやう。

聖白は早朝人相あり上客に新節を挨拶させ
 せ。又我父母にも挨拶させ。その人にか
 房にまゐり。そのおのれ村の内の親戚に挨拶
 廻りに行く。その後その日は又は二三日は新
 節は自宅に留まり。上客は勿論之に留まり。其
 上客は時々前にも房にまゐり新節を挨拶
 けり。又新婦は上客に酒をすすめ。その時
 上客は指輪カガシを新婦に渡す。上客は時々、後
 に新節の。新節は自宅に留まり。父母、宗廟
 の親に親おす。宗廟をけしはソノチに挨拶

接の
礼を
すよ。
新
郎又
み
す
の
い
き
。
新
郎

結婚に
おす。

つゝは
ン
4
2

9
12
3
0

三
日
國
行
上
玉
子
子
子
子

お新婦の宋に一
七五九

手紙の
五
折
々
二
行
く。
この
時
に
又
村
の
若
者
達

み
い
た
つ
う
も
う
よ
6
雨
行
の
初
は
新
婦
の
原
に
泊

2
 〇
 大
 抵
 二
 三
 は
 泊
 2
 〇
 著
 者
 達
 の
 い
 た
 つ
 う
 は

女
 視
 の
 聖
 は
 又
 は
 雨
 行
 の
 は
 12
 行
 は
 小
 d
 6
 王
 水
 王

ト
ン
サ
ン
エ
と
と
お
。
同
席
祝
と
書
く
。

同床禮は新婦の宗で新婦の親戚の若くは村
の若くは遠か新郎におこしせよぬにいとつうす
まういふ。ま、新郎は新婦の宗でおこし
まう。姑の聖日新夫婦を結いつけと進む
いたうちとす。新婦の宗で甲斐王を世は
す。いとくいとやととつたりす。退の形を
さしとやととつたり。結むは新婦の
宗でぬめとや。そのおに随分甲斐王をさし
たうとと。色に給ふしと注文す。のりあ
る。同床禮は姑の宗の聖日又は兩家の
に

行はけよ。同席裡を行わくは禮と云ふういは
 たく若い者の自新のな行為なり。高麗裡を
 しる者達には女の宋へは大々不睦と酒をあう
 うみゆにあらんや。
 高麗裡や同席裡はゆるしや。然しり起ると
 文無としさうにかゝる宗はなしなり。豊崎もあ
 り~~有~~新婦の親戚の助力を誘ふすゝめにあ
 る。姻戚間の威力とある市威運動であらう。
 兩所に行くとき女の宋へは男に衣服を作つて
 やる。兩所の婦人には男は女の嫁に逢ひしゆく

婚の式の後、
 廿の字に廿を
 添へて置くと
 キンダ（いせいのこ）と
 読む。

(9) 形有禮と云
お嫁の礼の形を
いふなり。この形を
いふは、婿入の御め
儀へ直ちに申す
娘入りの方(こう)
禮(れい)を仰めのことな
り。さしまた、後には身
方は親族に留ま
るゝなり。この形も
たれば婦人、この方
が、お嫁の礼の形を

自由の道にあらばなる。その代り、
 何位つく。去つたといふと、
 何れもいふ事と希望する。今の
 一二年の間であらう。もし男の
 是にあらば、事にならう。高
 男、女の字に色あつた。何れ
 の字に嫁入りする。式あり。その
 あつた。配として、女の父、
 親の男、一人づつ行く。下女、
 一人づつ行く。

せ一人あせよ。以下女一行に等すと。西

方の下女の間に帝の妃と。西方の下女は

婦の室を自分としやうと互いに争ふのであ

る。男は形式ではなく實際に争ふのであ

る。事。山キングの回に出た子と

新婦は新婦の隊連れ子として行く場合も願

あ。新婦は男十五才で廿七ハ才で結婚し

た。早始の男に連れ子。事はそれなり

くあつた。

男郎に宋に行く。女郎は親に足る。終

に は 、 祐 佐 の 世 (新 郎 の 姉 、 兄 嫁 等) か 指 導 し	利 し て も あ ま れ ば 名 指 り さ り す 。 女 の 所 側	尊 房、 は 一 人 毎 に 祝 を し て 酒 を つ く 。 其 他 に	多 い 。 又 庭 で 奉 あ 。 新 婦 は 新 郎 の 直 前 の	を 姑 ^コ 舅 祝 を あ 。 姑 舅 祝 は 大 庭 に 行 お 場 合 か	お の 父 母 は い ろ 何 の 近 新 に 控 座 を い ろ 。 そ れ	に ソ ン タ ル 祝 を し お け た は な う ぬ 。 そ の 上 お 酒	く つ い ろ 。 金 の お う ま と 、 婦 婦 は え つ つ 分	い ろ 女 に 人 接 え つ く 。 新 郎 は 金 廊 の 膝 に つ	廊 は 金 廊 に 、 新 婦 は 女 内 房 に お く 。 そ の 新 男
---	---	--	--	---	--	---	---	---	--

乙種をさせ、酒も袖佐の女が「いゝ新婦は
手とあつた。丈で、あゝ。整頓箱に薬を、の土産
と封つて来てあるのい、それだすゝめよ。
し分派新婦の一節か持参して来てもうよのゝあ
り。こゝに玉飾帯とは贈り物即ち祝物の意
であらう。謝禮は其お返しの意味であらう。
L娘舅様から晩まで又后事がある。倉庫は内房
と金庫に分れて行けぬ。男と女は別々であ
る。食事は晩まで給配として、郊外の新婦の家
では其日又は翌日に喰ふ。喰ふ時新婦の父

は内房に穿けり。娘と袂の移移をす。

娘は父に最終の盡をす。父は將來に致

して訓詞の所を事と云ふ。是の時娘は一般に

聲をあげて泣く。

其夜かゝお嬢は新夫と一夜に寝く。三日目

位かゝ同氣を。お嬢に云ふ。

以上述べたる如く婚禮の終に至りて

の如きかゝる。新婦は新夫と同居す。

お嬢は其の時如くお嬢を新夫の形式に他はこれ

の如し。新夫と云ふ形式も。新夫

シンボル

神は婚禮の後には正に姑舅祀あり。然し
 その終二五年後は新婦は其宅に生活し
 中心の地盤あり。新夫は其同新婦の宅
 に過か事前の瑞合といひあり。この形式も
 此地方に著ありあり。然し此
 の新夫は稀にしめ行はれあり。この方か
 加多くありありあり。
 姑舅祀あり。新婦は其宅に死め
 あり。起居す。新にありありあり。姑舅祀の
 終新婦は三年間に生家にあり。その生家に

此
解
之
ミ
キ
い
と
あ
。と
い
う
し
む
の
意
を
い
ふ。
。

送為す。其日了は忙常に去い。大低は数ヶ月て。

子
 〇
 智
 三
 年
 下
 七
 生
 字
 に
 返
 る
 ず
 〇
 星
 の

場合
新大は
通し
行く
ところ
新妻の
許に
通る

てあ
。 女 仁 富 祝 子
わ 托 け ー ー ン 夕 の 時 刻 に

折
し
こ
(2)
折
ゝ
ぎ

新婦の子を産む場合に
生字に「の」を
加へ

古
時
に
は
手
を

三
十
は
異
例
一
あ
二
。
生
母
か

お産の午御いに
来よ瑞合は
あふ、
あふも余

り
著
述
の
す
べ
し
何
ぞ
い

新即新本の女の親は、
婿社におりて、
山女、
留

社んねん、も互に相見、擧手はない。男の親
 同志は婚姻に於いては姑舅社に於いては相
 手、かゝる事、女の親同志は姑舅社に於て
 ても高は相見、擧手はない。其の事、にし
 置ける永久に相手を擧手はない。サト、お
 は女の親同志と等しくせよ。為の社に於て。サ
 トンは婚姻の意、お手は其の意である。大
 抵、新行の條に於ける、第一、新行は本。
 小キ、女の勤、おきく三年、此にも、場合
 にはサト、お手は新行の前に於ける。男の

かゝ行くすゝも、せの例かゝ行くすゝも

。大抵はせの例かゝ行く。其時にハ二三泊す

ゝかゝるゝ。そのお祝に又男の例かゝる行

く。サトシおやかすめは、あとは男の例かゝ

ゝせの例かゝるは女かゝるは自由に行く。

二部

部 落 神

(府君堂とスサノイ)

3

月瀬里内の各洞には皆一様に部落神とし

二種類の神作対象あり。一つは府君堂とい

はスサノイといふ。月瀬里内の各洞が皆さ

ういふ。ほか、龍埴里内の六十五の

洞に、いゝも皆然りあり。但し月瀬里内の

全二つの洞になつて居る。松田洞にはスサノ

イは現れ、面長さんの自宅の前にあり、

あ、府君堂は存しない。然し、當り存して居

た府君堂の地に私自自行つてもサレし。その

府君をいとし、てくたつてか、いふこの
情もよく分つてす。その事についで、後
記したいと思ふ。

府君もスサミサミも昔に洞の宇麻神とし

て此辺に何水の洞にもゆき、あまの木の橋へ

あふ。龍坪雨か、瑞興の色ぬ^{を經て}に修め、そのか

う新幕あ、和任経あ、すつとあつた、あふ

か、その途中に通過した洞にり達観して、し

た何水の洞にも、あふ、堂本、あふ、クンサ

い、府君も、あふ、の小さな村が、高い山の上

にあつてすぐそれと分るのであつた。又スサ

の家燕の同やう

にすゝ山人宋の附近に一とすは高く聳え

ゝ瑞合か多一のてすぐそれと分つた。

月瀬兜のぬのぬの洞の内に松田洞と下松

由洞の二つは外にわけは村君

し。財力豊かなと二つては堂を建てて居る場

合もあゝとてあゝ、一般には小さな村であつた。

山の頂上にはあゝ、月瀬兜露積洞の府君堂は都

その林の木がフクシイである。

落の春好にあゝ山の尾根の上にあつた。雨積

落の春好にあゝ山の尾根の上にあつた。雨積

洞は此^所に群居して今、韓山李氏一門の宗
 家のありとこでこの辺いは一畠さい部族と
 思ふ。此^所よりいふ。それでその府民衆
 は此^所には一畠さくかうありとのであうり。
 この府民衆はノガサとある針葉樹のあさな林
 で、此^所の周囲には石の多い草^原であつた。
 ガサ^林所^にに足り水^は。府民衆林の中に入つ
 て見ると四五坪位のや、空地になつたところ
 がある。此空地に入ると正面の一本のノガサ
 に布かまきつけである。其の木が、^{陰戸の}九月

にあつた

九月の如く、
 の外に、
 前に、
 耳、
 作、
 、
 二、
 な、
 林、
 布、

一、かたよと云ふ木は成木か小帯にあそい木で
 二三箇のものといふ数すやしたつて片どを云ふ
 事であつた。布をつけた夕シナ山の苔^シには
 祭壇よりく人をかへてあそはへもない。然
 し茂木の直ぐ傍には岩石が露れし二片ど。他
 し比山には岩石が露れし二片ど。二片どは
 と二片どよりわりの二、二片どは二片どはな
 い。又その岩石が何か^{特別}の形をして片どつて
 ないかと云ふ深く足んけたと云ふ時は變つたと
 ころはつた。祭壇よりいふものは何もない

か、~~祭~~ ^祀の時とすゝの例から祀のかは、土地の
 傾斜の形や前向か、幾分空地^地となり、
 知事事かある。その中にすゝと、布のついで
 夕、ナハは~~常~~ ^常向して片ど。即ち祭家は此木
 の南面に坐して北面して氏木を祀り、
 〇村中に何か人のあはれは智にかと思つゝさ
 かしゝ足んか、何しやない。然し空地よりくま
 二片どと二つの一隅にサレ土を掘り返した様
 子と^{ころ}、
 二片どと三つあつた。その外には金一

人為のあはれない。強いて云へば此林を伐
 採しな^てい強し^てて所^てとこに消れた人為があ
 ると云へば云ひ^ふ。林の中にはノカ^ノの外に
 数本のクヌギの木もあつて居る。林は全休
 て三四十坪位であらう。^の然^のの
 新葺^しの人達は九月九日に祭家^のこゝに来^る
 祭りをあつた外には、平日に他人の^に
 り来よ採^る事^は金^金出^出ない。こゝに^に参^参り^りに来よ
 にはあつて七^七の^の齋^齋戒^戒があつて、少^少
 し穢^穢れ^れかあつてこゝに来^来は^は交^交つてい^い神^神

四つと蒙とを記せしむる也。

この露橋洞の府石堂は、此は京城の

近郊牛耳洞の府石洞を思ひ去した。この牛耳

洞の府石洞は、統制府、都府、府の甲に足取り、同か

示してあり。露橋洞の府石堂は、大牛耳洞の

府石堂と同一形式である。月瀬、各洞の

府石洞は皆大牛耳洞の形式のりて、神像とし

て、可なり。は、橋木である。府の人に同く、と

露橋洞の府石堂や、同散洞の府石堂、神像は木

と、石たるといって、府石の、露橋洞の府石堂の

神作と云はれ、石は地上に露出し、片は岩の
てり。か、氏所名電のあり山には野々として
にそんな岩が露出し、片は。回散洞の新名電
の神作と云はれ、石は、明くかに一見果然と
ある。岩の形が怪異であり、その形は、其
が大変な巨匠を山の土に落ち、置いた。
に見え、こゝでは、布、木にくっつき、
けられ、この大いなる岩の前面の土の上に置い
てあり、こゝにはこの新名電は、虎根の上にな
り、流れており、不、虎根つばき、樹木か、そ

B 5 判

はる。その石の所に新島洞はソナノ域陸
の地質も、この片方のところから。知し四鼓洞
と松田洞との間にある。山のソナノは余り大さく
でも一つ又一つの木である。
L 四鼓洞の新島洞の中心には赤松と楠とあり、
その二股に根本が分れるやうな楠がある。
樹心で神聖視する。片方は山にある。楠字を用い
て片方だけ地の楠とは明らかな区別を
表す。また、知しこの楠には布衣はく、
板敷洞等がある。知しこの楠には布衣はく、

此や磐岩に用いられ、基杭の破片は、腐朽
 著おし、置いてある。人為を加へた跡は、
 ほゞ外には何もない。露積洞の場合、
 露洞の場合、神像と云ふところ、
 みに、一区域の林地が、神龍を
 示す。その一木一石も、
 神の神である。

ク、これはその田一帶には赤松が繁つて居る。

篤徳洞

梨の木

斎院洞

柳の木

内洞

柳の木

陽村洞

栗の木

露橋洞

ノカケの木と石

散洞

楠と石

次にスサノサミも、仙水の洞にもある。新田

堂が、岩山の上又は山腹にある。りに刻して、スサ

ノイハは、真境のすぐ傍又は人家の間にある。

の路路

ス	サ	ニ	ト	ハ	ニ	ハ	口	で	く	つ	ろ	り	わ	文	同	で	新	祝	了
を	儀	へ	、	所	名	堂	に	は	形	式	に	ハ	乙	祭	又	を	読	む	か
に	は	果	の	儀	を	供	へ	、	ス	サ	ん	す	い	に	は	新	祝	の	儀
や	新	祝	の	儀	式	は	明	く	か	ん	聖	つ	〜	片	は	、	所	名	堂
。 後	に	乙	の	新	祝	の	日	は	同	日	に	ハ	ア	カ	祭	物	祭	物	祭
と	乙	の	新	祝	の	日	は	同	日	に	ハ	ア	カ	祭	物	祭	物	祭	物
つ	た	。 所	名	堂	か	山	の	神	、	ス	サ	ん	す	い	か	山	の	神	祭
〜	山	と	同	儀	か	ア	、	か	い	ろ	か	は	祝	地	で	祝	め	ア	カ
岸	に	あ	、	た	カ	、	ス	サ	ん	す	い	か	大	抵	山	新	に	あ	つ

だ。前部公式的に、得るは新的、前にか
 ずいぶん、強えけや性的と云つた所が威い
 だ。
 回敬詞の「サレ」には實に足事取匠本であ
 る。此洞の内にこんな匠本は他にほ全然ない
 。楠木と漢字で「あらのこ」といふ。この楠木
 は、他に「府君」のタレといひて一本書の外
 にほ、全くないところである。これ新め
 定んと二つして「氏雨」とは同一の指抱ては有へ
 ぬに、
 板に「おん」。
 回敬詞の「サレ」はおは氏尊殿の

の人字のすく附近のわいの岸にあって、その
 すくそけいには湧泉があつて、スサにすいの根本
 には柳（沼山の）と藁の根つた二尺ばかりの人形がす
 ち、あつて。又今うわさくしないうち、定め
 あつた。総て他人の神祇のわいの野郎で、
 柳室洞のスサにすいは今の近きさん、宋の
 庭ついで、と二つにある。矢張りわいの岸にあ
 る。そこが、ほろのやうに流のとこに、柳室
 洞、井戸がある。二の、スサにすいは柳の木た
 と、わいの岸に、あつた。根を、わいの岸に、は多くの柳

内洞	蕭堂洞	篤徳洞	治の好む所。	月夜足内の各洞にある。スサハサハの樹は	ある。洞の入り口は	大樹の所である。この位の大きな樹は洞内に	新乳の吃物である。このスサハサハは余り	の好む所である。あつた。又地上に落つては	片まつてあつた。又地上に落つては
柳の木	柳の木	柳の木							

陽村泊

栗の木

露橋泊

柳の木

四敷泊

楠の木

松田泊

榎木不明

柳の木と云つても所渭は左柳いはなく、楊

と云つてあらう。ボボラの乱い事。

所をたぬいふサレたぬい

祭りは一季一四九月九日に、雨を苦に、雨を同日に

行はれど。四敷泊では祭宿は女であふ。即ち

祭日か近づくと言ふ洞の内で二人の祭宿にな

ふ。廿か翌宿さふ。所をたぬいふサレたぬい

に對するもの

若とあつてゐる。祭壇には、その末の病人の
 片割の家の若い、子が多くなく、
 婦人が選定された。子が多くと不潔な事であ
 りかゝつてゐる。祭壇の前に祭物として白い米
 の餅と雑穀の餅を用ゐた。一人の祭壇は
 米の餅を捧つて九月九日の夕方に七時吹
 石巻に詣つてその米餅を供へ、洞門の平安を
 祈る。又一人の祭壇は雑穀の餅を捧つて
 クリスマスのところに行つてその供へ洞門の
 平安を祈る。餅の材料は各人から出し合ひの

かとういふ。

有定洞いは所居をスサノの祭官の

定は毎年九月一日に洞居を周つて決ます。

その祭官のうと若に祭官のうと決ます。

祭官の宋には一箇子あかす他人の出入は禁

かす。又部族内は外部との出入は禁

かす。若し祭りまの同に部族内は死

者あはれは祭は延期となす。祭は九月九日

す。かす九日祭とす。一船には所居外を

とす。

社元等の祭官は祝官か一人、祭主一人、外
 に祭えの妻か献酒の用^物の補助役につい
 行く、又その外に祭物の運搬の爲に二人位執
 用^役の名かつて行く。祝官は祝文を讀む人
 である。斎室洞内には祝文を讀めし人は今
 三人（区長、^某、^某）老人、第四理^某）しか居るついで
 は五人か、祭者に祝官と称する。祭えは祭
 物の用をとり、又祭えの^の祭者。
 社元等には九日の夕方七時に行く、是つ
 祭物を配す。祭物には米の餅、鶏肉、梨、

新、菓、~~茶~~、茶、酒、水、貝等、（祭物）
供へる香を三々、三折し、次に祀所へ
祀文を讀む。そして三折す。そして祭る
に祀所へ餅をわさく切り四角にわき、（注）撒く、酒
菓その外の祭物も皆さし、四角にわき、撒
く。それか、白紙を木に書きつけ。それ
祭式は読ほ。この向二五時分はか、よ。祀
文の文句は同一文で、（山）毎々清書す。祭
の式は終ると祭所へは、（山）下りか、甲斐ある
りに果すと大で村の人々に式が終つて、

昔に、紫えの字に集りしと知る。かくて
 の人へは紫えの字に集りし紫物の類、しを
 二世あり。紫の聖日は休むるにたつて
 二子あり、此日は畑作地方へは随分多忙の時
 二子あり、かゝる休むる。

〔次〕に、下サに、すいの紫物は女一人あり。紫
 物とし、は親類の類、しを酒と、しあり。九
 月、日の夕方、府君の紫物、しを酒と、しあり。

すいの紫物に、たつ。しを酒と、しあり。紫物に
 たり。女一人あり。紫物に、たつ。しを酒と、しあり。

乙字下

ころへ行つ祭物を供へて祀ふ。その時は祭
文はかく口頭で新し文句もふか、その文句
は一定して片だ。その文句は

この洞中には~~あ~~あ。人の数も~~あ~~人居

る。悪い病氣と~~あ~~悪い行い~~あ~~は牛馬万

里遠いところにレリぞけ、牛も豚も鶏も

一匹も死なない様にし下さい。年中悪

い病氣は入らぬ様に助け下さい。おや

新築の隣人達は何かいぬか、スカルナ

は何かい知つて居るか、助け下さい。

府
 名
 也
 又
 甘
 心
 十
 心
 七
 巫
 女
 七
 什
 府
 領
 以
 有
 一

ンタニて歌舞をやつて世をのこす。その時
 に村の人達も之物にゆく。九日祭は午で巫
 が行われはクツである。巫が片方しかはクツ
 は出来ぬ。

松田洞の穴は現在府民売かたひ。前には松

田洞から田藪洞に通ず。峠の尾松ついでその松

田を見下すとそこは府民売かたひ。ポクン

十は皆余松と見すな松の木であつた。い。

此外、栗田雨の松月見の九道寺(今は歸進寺の

傍か、その寺の建立の為に築かつて一月

[illegible]